論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 690 号	氏名	鈴木　基

学 位 審 査 委 員	主　査　　中込　治 副　査　　橋爪　真弘 副　査　　森田　公一

１　研究目的の評価

インフルエンザワクチンがどれだけ有効であるかは公衆衛生政策上の大きな問題である。本研究は、検査陰性群を対照群とした症例・対照デザインにより、我が国におけるインフルエンザワクチンの有効率(VE)を明らかにすることを目的としているもので、妥当である。

２　研究手法に関する評価

インフルエンザ様疾患による長崎市内の中規模病院の外来受診者を対象集団とし、検査陽性群（PCR 法）を症例、陰性群を対照とするマッチングのない症例対照研究である。潜在的交絡因子をモデルに組み入れた多変量ロジスティック回帰分析により調整オッズ比(OR)を求め、VE を(1-OR)x100 で算出している。流行株のヘマグルチニンの分子系統樹解析により、ワクチン株との一致性も評価しており、研究方法は妥当である。

３　解析・考察の評価

2011/2012 流行期のインフルエンザワクチンの VE は非常に低値であった。その原因の一つが流行株とワクチン株の不一致にあった。インフルエンザ以外の呼吸器ウイルスを対照群とした時が VE が最も高かった。また、臨床現場で多用される迅速診断による検査陰性群を対照群とした場合でも、PCR 法と同等の結果が得られた。本研究の結果には統計学的有意性がほとんどないという短所があるが、その解析と考察にあたっては、VE を症例対照研究により算出する場合の疫学的方法論が詳細に検討されているのみならず、ウイルス学的メカニズムも考察されており、学位論文として非常に高く評価できる。

本研究は、今後のインフルエンザ研究とくにインフルエンザワクチンの有効性に関する研究に寄与するところが非常に大きいと判断され、審査委員は全員一致で博士（医学）の学位に値するものと判断した。